

源氏物語

関屋

紫式部

青空文庫

逢坂あふさかは関せきの清水しみづも恋人のあつき涙もな

がるるところ

(晶子)

以前の伊予介いよのすけは院いんがお崩れかになつた翌年ひたちのすけ常陸介ひたちになつて任地へ下つたので、昔の帚木ははきぎもつれて行つた。源氏が須磨すまへ引きこもつた噂うわさも、遠い国で聞いて、悲しく思いやらないのではなかつたが、音信おんじんをする便たよりすらなくて、筑波つくばおろしに落ち着かぬ心を抱きながら消息の絶えた年月を空蟬うつせみは重ねたのである。限定された国司の任期とは違つて、いつを限りとも予想されなかつた源氏の放浪の旅も終わつて、帰京した翌年の秋に常陸介は国を立つ

て来た。一行が逢坂おうさかの関を越えようとする日は、偶然にも源氏が石山寺へ願ねがほどきに参詣さんけいする日であつた。京から以前紀伊守きののかみであつた息子むすこその他の人が迎えに来ていて源氏の石山詣もうでを告げた。途中が混雑するであろうから、こちらは早く逢坂山を越えておこうとして、常陸介は夜明けに近江おうみの宿を立て道みちを急いだのであるが、女車が多くてはかがゆかない。打出うちでの浜を来るころに、源氏はもう栗田山あわたやまを越えたということで、前駆を勤めている者が無数に東へ向かつて来た。道を譲るくらいでは済まない人数なのであつたから、関山で常陸の一行は皆下馬してしまつて、あちらこちらの杉すぎの下に車などを昇かぎおろして、木の間にかしこまりながら源氏の通過を目送しようとした。女車も一部分はあとへ残

し、一部分は先へやりなどしてあつたのであるが、なおそれでも族類の多い派手な地方長官の一門と見えた。そこには十台ほどの車があつて、外に出した袖の色の好みは田舎びずにきれいであつた。齋宮の南向の日に出る物見車が思われた。源氏の光がまた發揮される時代になつていて、希望して来た多数の随従者は常陸の一行に皆目を留めて過ぎた。九月の三十日であつたから、山の紅葉は濃く淡く紅を重ねた間に、霜枯れの草の黄が混じつて見渡される逢坂山の関の口から、またさつと一度に出て来た襖姿の侍たちの旅装の厚織物やくくり染めなどは一種の美をなしていた。源氏の車は簾がおろされていた。今は右衛門佐になつている昔の小君を近くへ呼んで、

「今日こうして関迎えをした私を姉さんは無関心にも見まいね」
などと言った。心のうちにはいろいろな思いが浮かんで来て、
恋しい人と直接言葉がかわしたかった源氏であるが、人目の多い
場所ではどうしようもないことであつた。女も悲しかった。昔が
昨日のように思われて、はんもん煩悶もそれに続いた煩悶がされた。

行くと来くとせきとめがたき涙をや絶えぬ清水しみづと人は見るらん

自分のこの心持ちはお知りにならないであろうと思うとはかな
まされた。

源氏が石山寺を出る日に右衛門佐が迎えに来た。源氏に従つて

寺へ来ずに、姉夫婦といっしよに京へはいつてしまったことを佐
は謝した。少年の時から非常に源氏に愛されていて、源氏の推薦
で官につくこともできた恩もあるのであるが、源氏の免職された
ころ、当路者ににらまれることを恐れて常陸へ行つてしまつたこ
とで、少しおもしろくなく源氏は思つていたが、だれにもそのこ
とは言わなかつた。昔ほどではないがその後も右衛門佐うえもんのすけは家に
属した男として源氏の庇護ひごを受けることになつていた。紀伊守きののかみ
といつた男も今はわずかな河内守かわちのかみであつた。その弟の右近うこんえのじ
衛丞ようで解職されて、須磨へ源氏について行つた男が特別に取り
立てられていくのを見て、右衛門佐も河内守も過去の非を悔いた。
なぜ一時の損得などを大事に考えたのであろうと自身を責めてい

た。

佐を呼び出して、源氏は姉君へ手紙をことづつてたいと言った。

他の人ならもう忘れていそうな恋を、なおも思い捨てない源氏に右衛門佐は驚いていた。

あの日私は、あなたとの縁はよくよく前生で堅く結ばれて来たものであると感じましたが、あなたは どうお思いになりましたか。

わくらはに行き逢ふみちを頼みしもなほかひなしや塩ならぬ
海

あなたの関守せきもりがどんなにうらやましかったか。

という手紙である。

「あれから長い時間がたっていて、きまりの悪い気もするが、忘れない私の心ではいつも現在の恋人のつもりでいるよ。でもこんなことをしてはいつそう嫌きらわれるのではないかね」

こう言つて源氏は渡した。佐はもつたいない気がしながら受け取つて姉の所へ持参した。

「ぜひお返事をしてください。以前どおりにはしてくださらないだろう、疎外されるだろうと私は覚悟していましたが、やはり同じように親切にしてくださるのですよ。この使いだけは困ると思いましたが、お断わりなどできるものじゃありません。女の

あなたがあの御愛情にほだされるのは当然で、だれも罪とは考え
ませんよ」

などと右衛門佐は姉に言うのであった。今はましてがらでない
気がする空うつせみ蝉であつたが、久しぶりで得た源氏の文字に思わず
ほんとうの心が引き出されたか返事を書いた。

あふさか逢坂の関やいかなる関なればしげ繁きなげきの中を分くらん

夢のような気がいたしました。

とある。恨めしかつた点でも、恋しかつた点でも源氏には忘れ
がたい人であつたから、なおおりおりは空蝉の心を動かそうとす

る手紙を書いた。そのうち常陸介は老齡のせいひたちのすけか病氣ばかりするようになった。前途を心細がり、悲觀してしまい、息子たちむすこに空蟬のことばかりをくどく遺言していた。

「何もかも私の妻の意志どおりにせい。私の生きている時と同じように仕えねばならん」

と繰り返すのである。空蟬は薄命な自分はこの良人おっとにまで死別して、またも険けわしい世の中に漂泊さすらえるのであろうかと歎なげいている様子を、常陸介は病床に見ると死ぬことが苦しく思われた。生きていたいと思つても、それは自己の意志だけでどうすることもできないことであつたから、せめて愛妻のために魂だけをこの世に残して置きたい、自分の息子たちの心も絶対には信ぜられない

のであるからと、言いもし、思いもして悲しんだがやはり死んでしまった。息子たちが、当分は、

「あんなに父が頼んでいったのだから」

と表面だけでも言っていてくれたが、空蟬の堪えられないような意地の悪さが追い追いに見えて来た。世間ありきたりの法則どおりに継母はこうして苦しめられるのであると思つて、空蟬はすべてを自身の薄命のせいにして悲しんでいた。河内守だけは好色な心から、継母に今も追従をして、

「父があんなにあなたのことを頼んで行かれたのですから、無力ですが、それでもあなたの御用は勤めたいと思えますから、遠慮をなさらないでください」

などと言つて来るのである。あさましい下したところも空蟬は知つていた。不幸な自分は良人に死に別れただけで済まず、またまたこんな情けないことが近づいてこようとすると悲しがつて、だれにも相談をせずに尼になつてしまつた。常陸介の息子や娘もさすがにこれを惜しがつた。河内守は恨めしかつた。

「私をきらつて尼におなりになつたつてまだ今後長く生きて行かねばならないのだから、どうして生活をするつもりだろう、余計なことをしたものだ」

などと言つた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

関屋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>